

OTANIing

大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!

樹心閣

2020.8

vol.222



この世界は味わい深く、大地の塵までが美しい

学校長 飯山 等

現代のわれわれが経験しているCOVID-19感染症は、社会の全領域に大きな影響を及ぼし、世界的には現在なお拡大の勢いを加速させており、日本においても再びの拡大局面に直

面している状況です。私にとって、それは、学校とはどのような存在なのかとの問いを、自らに問わずにはいられない日々でもあります。学校とは、教育とはという一概な問いとしてではなく、中学生、高校生という成長期に固有なかけがえのなさとして、学校生活はどのようにあるべきかという問いとして行く手に大きく屹立しています。20年後の「わたしたち」が、いまの「わたしたち」を振り返っている場面を想像してみます。そのときわたしは、いまのわたしをどのような思いで振り返っているでしょうか。できうれば、未来のわたしたちから、ありがとうと感謝されるわたしたちでありたいものです。

歴史の険しい歩みのなかで、ようやくにして獲得された、人と人とが親しく距離を近づけて、互いの安心と信頼を確かめ合う新しい場の開けは、人々にとって世界を大きく前に進める喜びでした。1913年アジア人として初のノーベル賞となるノーベル文学賞を受賞したタゴールは、「この世界は味わい深く、大地の塵までが美しい」と、深いリスペクトに基づく信念を表白しました。さらに、「人間への信仰を失うという痛ましい罪は犯しはしないだろう」と自らへ言い聞かせるように言葉にしています。彼がこう語ったとき、身を置いている祖国インドの現実は過酷なものでした。そのただ中での、この真っ直ぐな言葉を、今の私たちもしっかりと胸に置くべきであろうと思うことです。

皆さんと同世代の藤井聡太さんが、将棋の八つの大きなタイトルの一つ「棋聖」のタイトルを獲得しました。17歳11ヵ月の史上最年少でのタイトル獲得でした。将棋のことはほとんど知らない私が、彼

のことに関心を持つようになったきっかけは、中学2年生でのプロデビュー、そして29連勝という華々しい活躍もありましたが、彼の誕生日が私と同じだと知って(もちろん年齢差は52歳あります)の、誠にミーハー的なものでした。以来、テレビニュースに映る、いつも相手より長く深々とお辞儀をする姿、落ち着いた穏やかなコメントが、対者への、ひいては将棋そのものへのリスペクトに満ちたものとして、印象深く記憶されました。タイトル獲得の翌日の新聞各紙にさまざまなかたの祝辞が載りました。その中で、囲碁界史上最年少の19歳でタイトルを取った芝野虎丸名人の、「結果の陰では血のにじむような努力を続けてこられたのだらうと想像します」とのコメントが心に残りました。19歳の名人の語った「血のにじむような努力」という一言は、決して世間流布の常套句的に出たものではないでしょう。19歳の彼が自身を照らし返しての確かな共感から出たコメントであろうと思います。「血のにじむような」という形容の実感を、我が身のうちに持つことのない自身を省みて、ずっと胸に残っています。朝日新聞の村瀬信也記者の、「何よりの強みは「将棋を楽しめる素質」なのだと思えてならない。対局中に1時間を超す長考をしばしば見せるが、集中するその姿からは考えること自体を楽しんでいるようにも感じられる」との署名記事も、その「血のにじむような」との言葉との対照ゆえに、人間の神秘、大きな謎として胸にあります。

「苦手は英語。もうちょっと頑張らないといけないなと思ってます。単語を知らないというところに一番の課題があると思います」とのほほえましいコメントもしている高校3年生。先の村瀬記者は、「私たちは「人間はどこまで将棋が強くなれるのか」という物語を見ているのかもしれない」と記事を結んでいました。私のような年齢の者にとって、若い人の素晴らしい活躍は人間の未来への希望であり、光です。皆さんにとってどのようなものなのでしょうか。「自分もさらに頑張ろう」、という勇気になればと思い、文にいたしました。